

ウィリアム・E・グリフィスと
代表作『皇国』のはなし

奥 正敬

■はじめに

明治時代初期にアメリカからウィリアム・エリオット・グリフィス (William Elliot Griffis, 1843-1928) という神学を修めた科学者が来日しました。彼は福井や東京で教鞭を執る傍ら、幅広い分野の日本研究を行い、帰国して“The Mikado's Empire” (『皇国』) をはじめ多くの研究書を刊行しました。

彼が牧師を務めながら書き残した著作は、日本関係の書物も含めて50冊にのぼるともいわれています。本書はその合間を縫って40年近くにわたって、版が重ねられました。

ここでは、彼が日本に関心を持つことになった理由などを振り返ってみたいと思います。

■化学を学ぶグリフィスと日本人留学生たち

グリフィスは1843年の9月にペンシルバニア州のフィラデルフィアに生まれています。青年時代に勃発した南北戦争では北軍に従軍し、戦いが終わった1865年に伝統校であるラトガース大学に入学して理学を学びました。在学中にグラマースクールの教師としてラテン語やギリシア語を教えており、人文科学系にも通じた優秀な学生であったようです。

このグラマースクールで、日本人で福井藩から派遣されていた日下部太郎と福井藩主松平春嶽の政治顧問を務めていた横井小楠の甥で熊本藩士の横井左平太・太平兄弟らを教えることとなります。彼らは1866 (慶応二) 年から幕府の許可を得て留学していたもので、教師グリフィスと生徒である彼ら日本人とは年齢も大きく違わないことから、接し合ううちにグリフィスの日本への関心が高まっていったと考えられます。

■神学も学んで日本へ

グリフィスはラトガース大学を卒業して、さらに神学校で学びました。この間、留学生の日下部が1870 (明治三) 年、大学在学中に肺結核

ニッポナリアと対外交渉史料の魅力 (33)

を患い客死しました。こうした中、長崎に滞在するオランダ人宣教師ガイド・フルベッキ神父を通して福井藩の要請を受け、グリフィスはお雇い外国人として来日を決意し、この年の12月に横浜に到着したのです。

彼にとって南北戦争の終了したアメリカと戊辰戦争を終えて国内統一を成し遂げた日本とが近い存在に感じられ、日本が将来に向かう姿に好感を抱いていたとも考えられます。

■教員として福井から東京へ

彼は、翌1871 (明治四) 年3月に日下部の故郷、越前福井へ赴任し、藩校である明新館で物理学と化学を教えています。ここでは欧米の事情も語っていたようです。

しかし、この年の7月に廃藩置県が行われたことによって福井藩は消滅し、10ヶ月余り滞在した福井に別れを告げます。1872 (明治五) 年の2月には東京へ移り大学南校 (東京大学の前身) で化学や物理を担当しました。

グリフィスは、この学校で教員が不足していたことから、専門の自然科学分野だけでなく、法学、地理学、文学、語学なども担当し、自分自身の学問領域を広げていたようです。この頃、明治天皇の御成りがあり、天覧の場で授業を行っています。彼の研究対象となる「ミカド」との出会いでした。

しかし、安息の日曜日を巡る見解の違いから文部省との契約更新は行われず、1874 (明治七) 年に帰国します。グリフィスは日本で過ごした約3年の間に人々の生活や歴史、文化、思想などを細かく観察していました。南校の教員として、学問領域を広げていた経験が文化の分析や研究に役立ったようです。

帰国すると再びキリスト教の研究を志してニューヨークのユニオン神学校で学び、1877 (明治十) 年に卒業して牧師を務めることとなります。この学校に在学している最中の1876 (明治九) 年に代表的な著作である『皇国』をニューヨークで刊行します。神学を学ぶ傍ら、日本滞在中の記録や論文を整理して著述活動を進めていたのです。

■日本人のグリフィス観

本書は二部からなり、第一部が皇紀元年とさ